

林
実歩

「私の呪い」

登場人物

森井 唯 (16)
鍋島 茜 (16)

高校一年
高校一年

森井江美 (48)

唯の母

柴田愛奈 (16)
吉野 桃 (16)

唯のクラスメイト
唯のクラスメイト

川島裕子 (37)
前田浩一 (30)
小山文子 (60)

唯の担任
美術教師
売店の店員

子ども

○学校・昇降口（夜）

前田浩一（30）、額縁に入った絵を壁に飾る。

○森井家・外観（夜）

住宅街の一角。

○同・唯の部屋（夜）

森井唯（16）、ベッドの上で教科書を音読する。

× × ×

窓から光が差す。唯、目覚めると教科書が顔に乗っている。

○同・リビング（朝）

唯、眠そうに自室から出てくる。テーブルの上には一人分の朝食。

森井江美（４８）、忙しげにコートを羽織る。

江美「唯」

唯「お母さん。なんでまだいるの？」

江美「寝坊しちゃった」

江美、玄関に向かう。

唯「ちよっと。これ忘れてるよ」

唯、テーブルに置かれていた書類を渡す。

江美「やだ危ない。ありがと唯」

江美、唯を抱きしめる。

唯「ふふふ。ねえ。遅刻しちゃうよ」

江美「はい。行ってきます」

江美、玄関から外へ出る。手を振る唯。ドアが閉まり、静寂。

唯、テーブルにつき、用意された朝食を食べる。

唯 M 「大丈夫：」

○同・玄関（朝）

唯、ドアに手を掛け、逡巡する。

唯「…大丈夫だよ」

外に出る。

○学校・外観（朝）

登校する生徒達。

○同・昇降口（朝）

上履きを履く唯。

唯M「今日は大丈夫」

壁に1枚の抽象画が飾られている。絵の下に「『無題』1年B組 鍋島茜」の文字。唯、絵に見惚れる。

タイトル『私の呪い』

○同・A組教室

川島裕子（37）、授業をしている。

川島「じゃあ次、森井さん。ここ読んでくれる？」

唯、ゆっくり立ち上がる。教科書は前夜、音読したページが開かれている。

唯 M「大丈夫」

川島「…どうぞ？」

教室内の視線が唯に集まる。震える唯の手。

川島「漢字が分からない？」

唯、小さく首を横に振る。

唯「あ…」

チャイムが鳴る。川島、ため息をついて、

川島「はい、授業終わり」

生徒、起立し礼をする。

○同・売店

小山文子（60）、店番をしている。

ショーケースにパンが並び、列を作る生徒達。

先頭の唯、100円玉を差し出す。

小山「どれ？」

唯、「ふわふわとろろりマシユマロパン』のポップを指差す。

小山「何？」

唯、萎縮して、

唯「や、焼そばパンを…」

小山「ハキハキ喋りなさいよ。こっちも忙しいんだから」

小山、パンを唯に渡す。

小山「次どうぞー」

○同・中庭

唯、日陰にしゃがみ、パンの袋を開ける。

唯「ふわふわとろろりマシユマロパンください。…はあ、なんでこれが言えないのかな」

唯、パンをかじり、涙をこぼす。

鍋島茜（16）、スケッチブックを持って歩いてくる。唯、鍋島に気付き顔を伏せる。

鍋島「失礼。ここで絵描いてもいい？」

動かない唯。鍋島、しばらく唯を見つめ、近くのベンチに座り、絵を描く。

鍋島「そこさ、結構虫とかいるよ」

鍋島、視線はスケッチブックに向けたまま話しかける。

唯「えっ」

唯、思わず腰を上げスカートを払う。

鍋島、笑って、

鍋島「こっち座れば？」

涙を拭き、鍋島の隣に座る唯。パンをかじる唯と、絵を描く鍋島。

鍋島「何年生？」

声にびびる唯。

鍋島「2年」

唯、首を横に振る。

鍋島「1年？」

唯、頷く。

鍋島「私も」

唯、会釈をする。絵を描き続ける鍋島。

鍋島「名前は？」

唯「森井唯。えっと…」

唯、鍋島に手を向ける。

鍋島「鍋島茜」

唯「鍋島…って、あの昇降口の絵」

唯、絵の下の表示を思い出す。

鍋島「ああ、うん」

唯「すごいね」

鍋島「うん」

絵を描き続ける鍋島。唯、気まづくな

って、

唯「…ご飯」

鍋島「ん？」

唯「食べないの？」

鍋島「うん」

鍋島、お腹が鳴る。顔を見合わせる2人。

鍋島「明日さ、パンもう1個買ってきてくれない？お金は後で払うから」

唯「え？」

チャイムが鳴る。鍋島、立ち上がる。

鍋島「お願い！私あのおばちゃん嫌いなんだ

よね」

鍋島、校舎に戻る。目を輝かせる唯。

○森井家・リビング（夜）

江美、スーパーの袋を持って帰宅。

江美「ただいまー」

ソファに座る唯。

唯「おかえり」

江美「お腹すいたー。夜ごはん昨日の残り
いいよね」

江美、冷蔵庫を開ける。

唯「うん」

江美、振り向いて唯を見る。

江美「なんかニヤニヤしてない？いいことあ
った？」

唯「何も」

江美「えー？」

食事の準備をする2人。

○学校・売店

ショーケースの前に並ぶ生徒達。先頭の唯。

唯「焼きそばパン2個…」

小山「は？1個？2個？」

唯、指を2本立てて見せる。小山、唯の真似をして指を2本立てる。

小山「2個？2個ね？」

○同・中庭

唯と鍋島、ベンチでパンを食べる。鍋島、片手で絵を描く。スケッチブックにはシマウマの絵。

唯「え？」

唯、驚いて鍋島を見つめる。

鍋島「何？」

唯「ここの風景を描いてたんじゃないんだ」

鍋島「ん？」

唯「なんでわざわざここで描くのかなって」

鍋島、眉をひそめる。

唯「あ、迷惑とかじゃなくて…」

鍋島「ここにシマウマがいたらって思ってた描いてるから、ここで描かなきゃじゃん」

唯、言葉の意味を考える。

鍋島「あとは、なんかここ落ち着くから」

唯、微笑む。

唯「あのね、私も売店のおばちゃん大嫌い」

鍋島「だよねー」

唯、パンの袋をいじる。

唯「ひとつ、手伝ってほしいことがあって」

鍋島「？」

○森井家・玄関（朝）

にやける唯、ドアを開ける。

○学校・廊下

教室移動ですれ違う唯と鍋島。目が合う。

○同・A組教室

チャイムが鳴る。唯、教室を出ていく。
その様子を見る柴田愛奈（16）と吉
野桃（16）。

○同・売店

小山の前に置かれた200円。唯、口
をぱくぱく動かす。鍋島、唯の後ろに
隠れ、声を出す。

鍋島「ふわふわとろろりマシユマロパン2つ
ください」

小山、怪訝そうな顔。鍋島、前に出る。

鍋島「おばちゃん怒った？まあいつも怒って
るけど」

唯、目を見開いて鍋島を見る。鍋島、
誇張した小山のモノマネをする。

鍋島「注文決めてから並びなさいよ。こっち
も忙しいんだから」

笑いを堪える唯。

小山「あなたねえ」

小山、2人にパンを渡す。

小山「大人を馬鹿にしてるなら痛い目見るわよ」

唯、慌てて、

唯「パン。好きです。美味しくて」

小山「え？」

鍋島、にやけながら唯の手を引く。

○同・昇降口

手を繋いで走る唯と鍋島。笑っている。

○同・中庭

唯と鍋島、ベンチでパンを食べる。

唯「ふわっふわ」

鍋島「うま」

唯、鍋島を見つめる。

唯「かっこいいね」

鍋島「は？」

唯「鍋島さんがいなかったら、一生食べられなかったと思う。ありがとう」

鍋島、困ったように笑う。

鍋島「そんなことないと思うけど」

柴田「いたいた、森井さん！」

柴田と吉野、唯に向かって駆けてくる。

唯、驚き振り向く。

柴田「急にごめん。あのね、実はウチら森井さんと仲良くなりたくて」

困惑する唯。気にせずパンを食べる鍋島。

柴田「お昼一緒にどうかかなと思って来たんだけど。ごめん。タイミング悪かったね」

吉野「よかったら今度どつか遊び行かない？」
唯、鍋島を気にする。

吉野「カラオケとか、パンケーキ食べ放題とか、なんでもいいよ」

柴田「それはあんたが行きたいだけでしょ」
吉野「あはは、バレた」

柴田と吉野、唯に顔を向ける。唯、口籠る。

柴田「…あー、嫌だったら全然いいんだけど」
唯、首を横に振る。

吉野「いきなり言われても困るよね。なんかごめん。また今度話そ」

校舎に入る生徒Bと生徒C。

唯「またやっちゃった」

鍋島「何を」

唯「話せなかった」

鍋島、パンを食べ終わり、袋を結ぶ。

鍋島「私邪魔だった？気にしなくていいのに」

唯「ううん。いつもこんな風だから。喋れな

くなるの。授業中とか、クラスの子に話し

かけられた時」

鍋島「今は喋れてるじゃん」

唯、頷く。

唯「おかしいよね。呪われてるみたい」

鍋島「誰に呪われてんの？」

唯「分からないよ」

鍋島「そりやそうか」

鍋島、唯にハンドパワーを送るポーズをとる。驚いて少し身を引く唯。

鍋島「森井さんは多分、人にどう思われるかって気にしすぎだよ。そんな感じがする」

唯、俯く。

鍋島「変わりたいなら、自分で変えないと」

唯「私は、このままでも、鍋島さんと一緒に

ご飯食べられたらそれでいいよ」

鍋島、面食らって、

鍋島「そ」

○同・廊下

柴田と吉野、並んで歩く。

柴田「やっぱり喋ってくれなかったね。森井

さん」

吉野「嫌ならそう言えばいいのに」

川島、向かいから歩いてくる。

吉野「あ、先生。森井さん友達と食べてまし

たよ」

川島「クラスの子？」

吉野「いや、多分隣のクラスの人」

驚く川島。

川島「そっか。また声かけてあげて。クラスに友達がいた方が、森井さんも安心できると思うの」

吉野、不満げ。

柴田「はい」

川島、微笑み、通り過ぎる。

吉野「なんでウチらなんだろうね」

○同・B組教室（夕）

放課後、1人きりの鍋島。スケッチブックの上で鉛筆を遊ばせる。思い立ったらように立ち上がり、教室を出る。

○同・美術室（夕）

前田、生徒の自画像を採点している。1枚ずつ裏に評価を記入する。

前田「B。C。：Bマイナス」

鍋島の自画像。

前田「うーん」

ドアがノックされる。

鍋島の声「前田先生」

鍋島、ドアを開け、入室。

前田「おお。どうした」

鍋島「あの絵、やっぱり取り外してもらえませんか」

前田、ため息をつく。真剣な顔の鍋島。

○（回想はじめ）同・校庭（春）

サッカーをしている生徒達。鍋島、校庭の端で絵を描く。ふと顔を上げると前田が見ている。

鍋島「うわ。びっくりした」

前田「上手いなあ。絵好きなの？」

鍋島「まあ」

前田「へー。いいね。見してよ」

前田、スケッチブックを奪いページを捲っていく。居心地悪そうだが、笑みが溢れる鍋島。

スケッチブックには様々な動物の絵。

前田「動物園よく行くの？」

鍋島「いや」

前田「？」

鍋島「校庭にカバがいたらとか、教室にフラミンゴがいたらって考えて描いてます」

前田、驚き、笑顔になる。

前田「面白いね。じゃあ先生の頭にミーアキヤットが乗ってたら、とかも描けんの？」

前田、2歩下がってポーズをとる。

鍋島「はい」

前田をスケッチする鍋島。

○同・美術室

美術の授業、絵を描く生徒達。前田、鍋島の後ろから絵を覗く。

前田「違うなあ」

鍋島、振り向く。

前田「なんかパツとしなくない？この間の方が良かったよ。もっと大胆にさ、黒とか使っちゃいなよ」

前田、鍋島のパレットに黒絵の具を出す。戸惑う鍋島。

○同・美術室（数日後）

完成した絵を見る鍋島と前田。後に昇降口に飾られる絵。

前田「鍋島、この絵コンテストに出してみないか」

鍋島「え？でも…」

前田「お前の才能はもつとたくさんの人に見てもらわなきゃだよ」

鍋島「嫌です」

前田「なんで。いいじゃん。減るもんでも無いだろ」

前田、イーゼルからキャンバスを取り上げて眺める。鍋島、浮かない様子。

○同・職員室（数ヶ月後）

前田、鍋島に賞状を渡す。

前田「この間のコンテスト、入賞したぞ。お

めでとう」

鍋島、躊躇いながら受け取る。

前田「先生の言うとおりに、応募してよかった
だろ？」

賞状を見つめる鍋島。

(回想おわり)

○同・昇降口

唯、上履きを履く。鍋島、壁の絵を見
つめる。

鍋島「…ごめんね」

唯、振り向いて、

唯「何か言った？」

鍋島「言っていない」

○同・A組教室(夕)

HRが終わり、帰る支度をする唯。柴
田と吉野、唯に近づく。

吉野「森井さん」

唯、振り向く。

柴田「この後予定ある？」

首を横に振る唯。

柴田「ほんと？」

○コーヒーショップ（夕）

カウンターで注文する3人。

柴田「キャラメルラテにホイップのチョコソースがけで」

吉野「ストロベリースムージーのミルク入り。ラズベリー抜きで」

唯、メニューを見て混乱する。

唯「お、おまかせで」

あ然とする周囲。

× × ×

席に座る3人。

吉野「おまかせって言うとそれ出てくるんだね」

唯の手にあるホットココア。

柴田「ここ来たことある？」

唯、首を横に振る。柴田と吉野、顔を見合わせる。

柴田「森井さん、中学どこだっけ」

唯、声が出ない。

吉野「聞いてどうすんだよって話だよね。あれ、森井さんって部活入ってる？」

唯、首を横に振る。

吉野「そっか」

ドリンクを飲む3人。

吉野「音楽とか何聴くの？」

口籠る唯。言葉を探す吉野。

柴田「漫画とかアニメは？私結構色々見るから、マニアックなもの分かるよ」

前のめりになる柴田。唯、絞り出した声で、

唯「…分かんない」

目を合わせる柴田と吉野。唯、2人の様子を見て、居た堪れなくなる。

唯「ごめん」

唯、席を離れる。

柴田「え？森井さん？」

唯、店を出る。唯を追いかけようとする柴田を止める吉野。

○繁華街（夕）

俯き歩く唯。

○森井家・リビング（夜）

テーブルを囲む唯と江美。江美、ケーキを箱から出す。

江美「ヒュー、美味しそう」

江美、キッチンにフォークを取りに行く。浮かない顔の唯。

唯「お母さん」

江美「ん？」

唯「私……」

江美「どうしたの？」

唯「私ってさ」

江美、唯の隣に座る。

唯「私ってなんで、みんなには普通のこと
できないんだろう」

唯、涙をこぼす。驚く江美。

× × ×

江美「そっか。そんなことがあったの」

江美、唯の背中をさする。すすり泣く

唯。

江美「唯は大丈夫だよ」

唯「大丈夫？：なんで？」

江美「だって今お母さんと喋れてるじゃない」

唯「違うんだよ」

江美「ううん。絶対大丈夫。大丈夫だから」

唯「無責任だよ」

江美「え？」

唯「大丈夫な時なんて無かった。今回こそは
大丈夫って何度も思ったけど、ダメだった
んだよ」

唯、江美の手を退けて立ち上がる。

唯「大丈夫は、おまじないなんかじゃないよ」

唯、リビングを出て自室に入る。果然と唯を見送る江見。テーブルの上に、手付かずのケーキ。

○同・唯の部屋（夜）

枕に顔を押し当て、声を上げて泣く唯。

○同・リビング（朝）

唯がリビングに来ると、テーブルに一人分の朝食とメモ。唯、メモを手に取り、

メモには「昨日はごめんね。お母さんには何ができますか？」の文字。

唯「何もできないよ。私だって、何も…」

○学校・A組教室（朝）

柴田、唯に近づく。唯、柴田に気付き、咄嗟に顔を伏せる。逡巡し、席に戻る柴田。

○同・売店

200円を差し出す鍋島。後ろに立つ

唯。機嫌の悪い小山。

鍋島「パン2つ。おまかせで」

小山「ちゃんと注文しなさい」

唯、怯える。

鍋島「おばちゃんのおすすめのやつで」

小山、鍋島を睨み、クリームパンを2

つ渡す。

鍋島「へー。これがおすすめなんだ」

小山「早く退いて。次どうぞー」

○同・中庭

ベンチでパンを食べる唯と鍋島。唯、

鍋島が描く絵を見つめる。

唯「あのさ」

鍋島「ん？」

唯「なんでもない。ごめん」

鍋島、手を止め、唯を見る。

鍋島「何？」

唯「：鍋島さんは、自分が嫌になること、ある？」

鍋島「あるよ。何その質問」

唯「そっか、あるんだ。ならちよつと安心かも」

鍋島、顔をしかめる。

鍋島「安心？私が自分のダメさを自覚してて安心ってこと？」

唯、焦って首を横に振る。

唯「鍋島さんみたいに強い人でも、そう思うことがあるなら、安心ってこと」

鍋島「意味分かんない」

鍋島、スケッチブックを強く閉じる。

我に返り、

鍋島「：ごめん。馬鹿にされたと思った」

唯「してないよ」

俯く鍋島。唯、様子を伺う。

唯「何かあったの？」

鍋島「最近、ずっと考えてて。なんで絵描いてるんだろうとか、なんで描くの楽しくなくなっちゃったんだろうって」

唯、一瞬息が止まる。

鍋島「芸術家って見せ物なんだよ。動物園の動物みたい。檻に入ってるやつ」

唯、たじろぐ。

唯「：違うよ」

鍋島「悪いことなんてしてないのに、評価されて、珍しがられて、何となく世の中から浮いてる感じ」

唯「それは、描ける人が少ないから」

鍋島「私は、人のために描いてない。描くのが楽しかっただけ」

唯、口籠る。

鍋島「知らない人に勝手に審査されて、賞もらったから飾ろうって：普通は、嬉しいことなのかな」

唯「普通：」

鍋島「多分、絵なんて描けなければよかった。
なんか疲れた」

唯、逡巡する。

唯「そうだね。私も、おかしいと思う。鍋島
さんは、何も悪くないよ」

唯を見つめる鍋島。

鍋島「それ本当に思ってる？」

唯「え？」

鍋島「私に嫌われるのが怖くて、思ってもな
いこと言うんでしょ」

唯「そんなこと……」

鍋島「そんなことある。ずっとそうだったよ」

見つめ合う2人。

鍋島「自分を殺してまで守りたいものが、あ
なたにはいっぱいあるんだね」

唯「え？」

気まずい空気。鍋島、立ち上がり、校
舎に戻る。

○会社

江美、席でPCを操作する。検索エンジンに「喋れない 家では」と入力するが、後ろに人が通り、慌てて消す。逡巡する江美。

○学校・A組教室（夕）

川島、教卓の前に座っている。

川島「森井さん。こんにちは」

仕事帰りの江美、教室に入る。川島、机を2つ向かい合わせにし、座るよう促す。

江美「先生。急にごめんなさい」

川島「いえ。お仕事は大丈夫ですか？」

江美「はい。早めに上がらせてもらいました」

川島「そうですか」

江美「それで、あの、電話でお話した唯のことなんですが」

川島「はい」

川島、ノートPCを開き、操作する。

川島「養護教諭に聞いたところ、恐らく場面緘黙症だと」

江美「場面…？」

川島、江美にPCの画面を見せる。画面には場面緘黙症の概要が書かれている。

川島「特定の状況でお話ができなくなる子です。ただ、唯さんの場合は全く声が出ないという訳ではないので、一概には言えませんが」

江美「…それは、原因は分かるんですか？」

川島「ストレスや不安によるものが多いようですが、こちらもはっきりとは分かりませんが」

江美、意気消沈する。

江美「…どうしたらいいですか」

川島「私の方では何とも。結局は本人が話しかどうかの問題ですから」

江美「本人が…学校でも対応していただかないと」

川島「こちらでも、授業で唯さんの発言の機会を増やすようにはしています」

江美、机に手をつけて立ち上がる。

江美「喋れないのに発言させたら、嫌な記憶が増えて余計喋れなくなるじゃないですか！」

か！

川島「一度でも話せれば自信に変わります！」
はっとする2人。

川島「すみません」

江美「いえ。ごめんなさい」

江美、ゆっくり着席する。

川島「とにかく、本人が少しずつでもお話できるように、サポートしていきましょう」

江美「はい…」

○同・昇降口（夕）

並んで歩く川島と江美。江美、絵を見て立ち止まる。川島、気付いて、

川島「生徒のものです。独創的すぎて、私には何が描いてあるのかさっぱり」

江美「…これ、ライオンみたいですね」

川島「？」

江美、お辞儀をする。

江美「先生、ありがとうございます。今後ともよろしくお願いします」

川島、お辞儀をする。

○森井家・リビング（夜）

江美、帰宅する。

江美「ただいまー」

唯、江美と目を合わせない。江美、ビニール袋を2つ掲げる。

江美「お弁当買ってきたよ。ハンバーグと生姜焼き。どっちがいい？」

唯「…どっちでもいいよ」

江美「えーお母さんもどっちでもいいな」

江美、シンクで手を洗う。様子を伺う唯。

唯「お母さん」

江美「食べよ。どっちがいい？」

江美、唯の隣に座る。唯、ハンバーグ弁当を選ぶ。弁当を食べる2人。

江美「お母さんね、覚悟ができた」

唯「え？」

江美「いや、唯が生まれた時から、覚悟はあったはずなんだけど」

江美、箸を置いて唯を見つめる。

江美「私、強いお母さんになる」

江美、唯を強く抱きしめる。驚く唯。

江美「唯がもし言いたいこと言って、傷つくようなことがあったら、お母さんが許さない。唯のこと守るよ。何があっても。絶対」

唯「お母さん」

江美「軽い気持ちで言ってるんじゃないよ。

お母さんにとって唯は何より大切なの。今まで気付かなくてごめんね」

唯、江美の背中に手を置く。

唯「私も、ひどいこと言ってごめんね。私ที่บ้านで喋れるのは、お母さんとなら安心できるからだと思う」

江美、涙が滲む。それ隠すように立ち上がる。

江美「昨日のケーキ冷蔵庫にしまっただった」

唯「ふふ。まだお弁当食べてるのに」

江美「お肉とケーキって意外と合うのよ」

○同・リビング（朝）

テーブルに一人分の朝食と、「唯がんばれ！今日はすき焼きにしよう」と書かれたメモ。メモを取り、微笑む唯。

○学校・昇降口（朝）

唯、壁の絵を見つめる。

○同・A組教室

チャイムが鳴る。教室を出て売店に向かう生徒達。唯、席に座り窓の外を見る。

○同・B組教室

鍋島、窓の外を見て、ため息をつく。

○同・昇降口（夕）

下校する生徒達。鍋島、靴を履く。

○公園（夕）

鍋島、ベンチで絵を描く。絵に納得い
かない。スケッチブックを覗く子ども。

鍋島、咄嗟にスケッチブックを隠す。

鍋島「あ…」

子ども、怯えた目を向ける。

鍋島「ごめんね」

鍋島、逃げるように公園を出る。

○住宅街・階段（夕）

江美、スーパーの袋にすき焼きの材料
を大量に入れて持ち、階段を登る。

江美「ちよっと買いすぎちゃったかな」

鍋島、階段の下から、スケッチブックを持って歩いてくる。

鍋島「はあ」

江美、階段を登りきると、手を滑らせ袋の中身が転げ落ちる。

江美「あ！」

鍋島、次々に転がってくる食材に驚く。

江美「すみません！」

鍋島、食材を拾い集め、江美に届ける。

江美「ありがとうございます」

鍋島「どういたしまして」

鍋島、立ち去ろうとする。江美、鍋島のスケッチブックの絵が目にとまる。

江美「あの絵……」

江美、大きな声で、

江美「ライオンの人？」

鍋島「はい？」

○住宅街（夕）

鍋島、江美の後をついて歩く。

江美「まさかあのライオンを描いた子に会えるなんてね。すごい偶然」

鍋島「あの、本当にいいんですか。ご馳走していただきいて」

江美「ちょうど2人分にしては買いすぎたと思っただとところなの。あなたこそ大丈夫だった？親御さん心配するかな」

鍋島「うちは、門限ないんで」

江美「そう」

江美、立ち止まる。不思議そうな鍋島。

江美「私、あなたに感謝してるの」

鍋島「え？」

江美、体ごと振り返る。

江美「実は、娘と色々あって悩んでた時にあなたの絵を見て。あの絵、ライオンが空を飛んでるように見えた」

鍋島「…そうですか」

江美「なんだか分からないけど、ライオンが飛べるなら、私ももつと頑張れるんじゃないかな」

いかって思ったの。力をもらえたっていうのかな」

鍋島、複雑な表情。

江美「あなたに助けられました」

鍋島「…いやいや」

鍋島、スケッチブックを隠す。

鍋島「もう絵はやめるんです」

驚く江美。

江美「そうだったの。残念。でも、私はあなたの絵に救われた。これだけは忘れないで」

江美を見つめる鍋島。

○森井家・玄関（夕）

江美、ドアを開ける。鍋島、遠慮がちに中に入る。

江美「ただいまー」

唯、リビングから歩いてくる。

唯「お母さん、カセットコンロってどこに…」

唯と鍋島、目が合う。

唯と鍋島「え」

江美「ん？」

唯、後ずさりでリビングに戻る。

鍋島「帰ります」

江美「どうしたの？」

鍋島「お邪魔しました」

鍋島、家を出る。あ然とする江美。

○同・リビング（夜）

鍋を囲む唯と江美。

江美「やだーお友達だったなんて知らなかった」

曖昧に頷く唯。すき焼きを食べる2人。

江美「あの子、絵やめちゃうんだって」

唯、一瞬動きを止める。

江美「でも、やめて幸せになれるのかなーって感じ。まだ悩んでる感じがした」

反応しない唯。

江美「何かをやめるって、幸せになるために決めることじゃない？仕事やめるのも、離婚するのもそう」

江美を見る唯。

江美「だから、人が何かやめようとしてる時はね、なるべく背中を押してあげたい。やめないでって思うのは、大体自分のわがまま」

唯「そっか…」

江美「だからお母さん、あの子にやめないでなんて言えなかった」

唯「うん」

江美「だけどね。自分に嘘ついてやめたことは、一生心に残って、呪いになるの」

驚く顔の唯。江美、我に返る。

江美「ごめんね。なんか心配になっちゃった」
江美を見つめる唯。

唯「心配になったのは、お母さんが呪われてるから？」

江美、笑う。

江美「ううん」

○同・唯の部屋（夜）

唯、ベッドに入る。

江美の声「自分に嘘ついてやめたことは、一生心に残って、呪いになるの」

唯「鍋島さんがどう思ってるかなんて、分からないよ」

唯、頭まで布団を被る。

○同・玄関（朝）

唯、目を瞑り、深呼吸。ドアを開ける。

○学校・A組教室（朝）

柴田と吉野、唯に近づく。

吉野「森井さん」

動揺する唯。

唯「あ。…この間は、ごめんなさい」

柴田「ううん。こちらこそ、無理に付き合わせちゃってごめんね」

唯、首を横に振る。

吉野「あのね。なんていうか、あの日のことは、チャラにしよう」

柴田「そう。これからもっと仲良くなりたいし、何かあったら私達に言ってよ」

吉野「ウチら本当に森井さんともっと話したいと思ってるんだからね」

驚く唯。

柴田「森井さんのタイミングでいいよ。もし喋りたいと思ったらいつでも話しかけて。

待ってるから」

唯に笑いかける柴田と吉野。

唯「：ありがとう」

柴田「うん。じゃあ：」

柴田と吉野、席に戻ろうとする。

唯「あの」

2人、振り向く。

唯「ありがとう」

微笑む柴田と吉野。川島、教室に入る。

川島「座って。授業始めるよ」

柴田と吉野、席に戻る。

川島「今日から授業のやり方を変えてみよう
と思います。プリントを配るので、自分の
考えを書いて、提出してください」

プリントを回す生徒達。驚く唯。

○同・A組教室（昼）

食事をとる生徒達。唯、窓の外を見る。
ゆっくり立ち上がり、教室を出る。

○同・売店

小山、シャッターを閉める。唯、歩い
てくる。

小山「もう全部売り切れだよ」

唯「すみません」

小山「あなた、お友達という時と随分感じが
違うのね」

驚く唯。

唯「私のこと覚えてるんですか？」

小山「嫌でも覚えるわよ」

唯「…そうですよね」

小山、ため息をつく。

小山「パン、美味しくて好きって言ってくれ
たわよね」

唯「え？」

× × ×

唯「パン。好きです。美味しくて」

小山「え？」

× × ×

唯「ああ。本当に美味しいと思います」

微笑む小山。

小山「ありがとうね」

唯、目を輝かせる。

唯「こちらこそ」

頭を下げる唯。走り出す。

○同・廊下

走る唯。

唯 M 「届いたんだ。私の言葉が」

○同・中庭

唯、走ってくる。誰もいないのを見て、
校舎に戻る。

○同・B組教室

唯、ドアから鍋島を見つける。目をぎ
ゅつと瞑って、

唯 「鍋島さん」

鍋島、唯を見て驚く。教室内の視線が
唯に集まる。

唯 「あ…」

鍋島、目を逸らす。唯、胸を2回強く
叩く。

教室に入り、俯きながら鍋島の席へ力
強く歩く。

唯 「えつと、昨日ぶり」

鍋島 「謝りに来たの？この間のこと」

唯「あの時…」

鍋島「怒ってないし、私も悪かったから。謝らなくていいよ」

唯「あの時なんて言うべきだったか、ずっと考えてた」

鍋島、煩わしそうに、

鍋島「いいって」

唯「嫌われたくないから、思っていないこと言っちゃったのかも」

鍋島「知ってるよ」

唯、震える手をもう片方の手で抑える。

唯「でもね。嫌われたくなかったのは、鍋島さんのこと友達だと思ってるから」

周囲の視線が唯を刺す。唯、深呼吸をする。

唯「鍋島さんが悩んでるなら、助きたい」

きよとんとする鍋島。

唯「私は、鍋島さんと出会ってから、毎日楽しくて。鍋島さんに助けられたんだよ」

鍋島「そんなこと…」

唯「そんなことあるよ」

驚く鍋島。

鍋島「どうしたの」

唯「鍋島さんが絵やめようとしてるって聞いて」

鍋島「ああ」

唯「もし、少しでもやめたくないって思ってるなら、やめないでほしい。ううん。そんなことが言いたいんじゃないよ」

鍋島、首を傾げる。

唯「鍋島さんの絵も好きだけど、絵を描いてる時の鍋島さんが楽しそうで、私はそれが好きだった」

鍋島「でももう楽しくない」

唯「それは」

唯、怯む。

唯「鍋島さんが楽しいって思えるまで、何でも付き合うし、手伝いたい」

鍋島「…今のは、森井さんの本当の言葉？」

見つめ合う2人。

唯M「違う。本当の、本当は……」

周囲、2人を見つめる。唯、手を握りしめる。

唯「本当は、絵なんてどうでもいい。描いても描かなくてもどっちでもいいよ」

鍋島、あ然とする。

唯「私は、本当は、鍋島さんとまた、ご飯食べたり、一緒に過ごしたいだけ」

鍋島、軽く吹き出す。

鍋島「前にも聞いたことあるなあ。それ」

唯、力が抜けへたり込む。驚く鍋島。

鍋島「ちよつと大丈夫？」

唯、息を整えて鍋島に笑いかける。

○同・中庭（夕）

ベンチに座る唯と鍋島。

鍋島「喋れない呪い解けたの？」

唯「ううん。呪われてるけど、無理やり喋った」

鍋島「うわ健康に悪そう」

唯「変わりたいたいなら、自分で変えなきゃって。」

鍋島さんが言ったこと、やっと分かったよ」

鍋島「うん」

唯「かつこ悪くても、とにかくやってみなきゃダメだよね」

鍋島「違うでしょ」

唯、鍋島を見る。

鍋島「かつこいいよ。やってみるって選択ができるのは」

唯、はにかみ、頷く。

鍋島「ねえ。手伝ってほしいことがあるんだけど」

唯「？」

○同・昇降口（夜）

鍋島、椅子に乗り壁の絵を取り外して

いる。唯、椅子を押さえる。

唯「大丈夫？先生に許可とか？」

鍋島「私の絵だからね」

唯「怒られない？」

鍋島「ちゃんと返すよ。誰かが救えるなら、人のために描くのもいいかなって思った。ちよつとだけね」

唯「…そっか」

鍋島「でもその前に、ムカつくから何かしてやりたいだけ」

取った絵を見つめる鍋島。微笑んで、

鍋島「おかえり」

前田、奥から歩いてくる。

前田「鍋島？おい！何してんだ」

鍋島、振り向いてニヤリと笑う。

鍋島「バーカ！」

鍋島、絵を抱えて駆け出す。唯、後を

追う。呆然とする前田。

○住宅街（夜）

並んで歩く唯と鍋島。

鍋島「そうだ。森井さんのお母さんにも、ありがとうって伝えておいて」

唯「うん。…私のお母さんとどうい関係なの？」

微笑む鍋島。悩む仕草をする。

鍋島「多分、私のファン？」

唯「ええ？」

笑う2人。

× × ×

手を振り、別れる2人。

○学校・昇降口（朝）

絵がなくなった壁。登校する生徒。

○同・職員室（朝）

鍋島、絵を抱えて入室。前田の席に向かう。

鍋島「おはようございます」

前田「あ。お前さあ」

鍋島、前田に絵を渡す。困惑する前田。

前田「一体何のつもりなんだよ」

鍋島「怪盗？みたいなそんな感じですよ」

前田「もう。俺が怒られるんだからやめてくれよ」

前田、額縁を拭く。

前田「いやー。それにしてもいい絵だなあ。やっぱり」

鍋島「はい」

前田「なんの動物だっけ？これ」

鍋島「何に見えますか」

前田「えー。ペガサス？」

鍋島「ふーん」

前田「答えはなんなんだよ」

ニヤつく鍋島。前田、絵を壁に立てかける。

前田「ん。そういえば、またコンクールの案内が来てるんだけど、出してみるか？」

前田、引き出しからチラシを出し、見せる。

鍋島「私しばらく筆を置くんぞ」

鍋島、チラシを突き返す。

前田「え？マジで？」

鍋島、会釈して退出。

○同・中庭

唯と鍋島、ベンチでパンを食べる。鍋島、旅行パンフレットを広げる。

鍋島「じゃーん」

唯「え？」

鍋島「色んな所行って、インスピレーションを受けようと思って。旅行行こうよ」

唯、目を輝かせる。

唯「行きたい」

パンフレットを見る2人。

鍋島「やっぱり温泉いいよね。私、美術館も行ってみたい」

鍋島を見つめる唯。鍋島、不思議そうに、

鍋島「何？」

唯、首を横に振る。

唯M「今すごい楽しそう。なんて、恥ずかし
くて言えなかった」

おわり